

今年の待降節(11月27日)から、ミサの中で使われる日本語の式文が改定されることになり、間もなく、そのための準備が始まる。改定される個所の一つは、慣れ親しんだ「あわれみ」という言葉に代わって、「いつくしみ」という言葉が使われることである。ミサのはじめに歌われる「あわれみの賛歌」が「いつくしみの賛歌」となり、「主よ、あわれみたまえ」の代わりに「主よ、いつくしみをわたしたちに」と唱えることになる。しばらくは違和感を感じるだろうが、少しずつ慣れて行きたい。

「あわれみ」という言葉には、人間のあわれで、みじめで、やりきれない状態に思いを寄せる、といった意味合いが強くあり、「あわれんでください」という言葉には、自分の今置かれている悲惨な状態から救ってください、という切実な思いが込められた言葉である。その意味で、「主よ、あわれみたまえ」という祈りには、叫びのような味わいがある。それに対して、「いつくしみ」という言葉には、すべての生きとし生けるものに注がれる神の大いなる愛、慈愛といった意味合いが強い。なぜ、「あわれみ」から「いつくしみ」に変更されることになったか、説明することはできないが、原文の一キリエ・エレイソン(ギ)、ミゼレレ・ノビス(ラ) — ということばには、両方の意味が含まれているのだろう。

今日読まれたルカ福音書第15章は、有名な「放蕩息子のたとえ」が記されている箇所である。前半の「失われた羊」と「無くした銀貨」のたとえだけを読んだが、いずれも、イエスがファリサイ派の人々や律法学者の非難、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」を受けて、イエスが語られた話である。当時のユダヤ人社会の中で「罪人」と呼ばれた人々は、文字通りの、犯罪人のことではなく、彼らは何よりも大事にしてきた律法を守らない人、あるいは職業柄守れない人を意味していた。律法の教えに背く行為に走る、徴税人や娼婦、さらには、神を信じることのない異邦人も同様に罪人と見なされていた。そして、彼らとの接触を厳しく戒め、自らの正しさ、あるいは、清さを誇りに思っていた。

そうしたいわば、ユダヤ人社会の中のエリートたちである、ファリサイ派の人々や律法学者に対して、イエスは、神の愛がどのようなものであるかを、たとえをもって示そうとされたのである。「罪人」と指さされた人の中には、それをまったく意に介さない人もいたかもしれないが、そうした社会的な差別を受けることから、自らの生活、さらには、存在にやりきれなさを感じていた人も少なくなかっただろう。そうした人々に、神の愛が及ぶこと、否、そのような人々にこそ、神の愛、父なる神の慈愛が注がれることをイエスは強調された。

聖書に描かれた世界、ユダヤ人の世界だけでなく、人は生きる限り、必ず、どこかで、あやまちをおかし、その過ちを忘れることが出来ず、自分を、あるいは、人をゆるすことができないまま、日を重ねている。自分で自分をどうすることもできず、ひとり、人知れず、悩みを抱えたまま年を重ねているかもしれない。そのような人間に対し、イエスは神のゆるしの愛を説かれる。彼らはあたかも、失われた羊のように、無くした銀貨のように、さらに、家を出て放蕩に身を滅ぼした弟のように、父なる神にとっては、一瞬たりとも忘れることのできない愛する子なのである。この人間が発する「あわれみたまえ」との叫びに神は、「いつくしみ」をもって、近づかれる。否、その子が神に向って叫びをあげる前から、叫び求めるように仕向けられる。それが、神の「いつくしみ」の愛である。人間にとって、必要なことは、自らのみじめさ、弱さ、やりきれなさを認め、「あわれんでください」と心の中で叫ぶこと、それだけなのではないだろうか。(S.T.)